

百年史編纂室 回顧と展望

—「立命館総合資料センター」への展開—



日時 二〇〇一年一月一五日（木）午前一一時～正午

場所 立命館大学 末川記念会館 館長室

鼎談者 立命館百年史編纂委員会顧問 岩井忠熊

学校法人立命館理事長 川本八郎

立命館百年史編纂室長 松岡正美

百年史編纂室の以前



松岡 編纂室の西川君が『立命館百年史紀要』第十号に掲載するために書いた百年史編纂室の経過の原稿をあらかじめお届けしていますが、一九九一年一月に「百年史編纂委員会」と同時に「百年史編纂室」が発足したわけですから、ちょうどこの一月でまる一〇年ということになります。その「百年史」の前史が一〇年ぐらゐあるわけで、百年史の前は「立命館史編纂委員会」のもとの「館史編纂室」という名称であり、それも当初は「立命館八〇年史編纂委員会」といい、出発は一九八一年です。

川本 天野総長と相談して、九〇周年を迎える時に「八〇年史」ができてくるようにしようということ、八〇年史編纂準備室を等持院西にあった校宅内に設置した。ところがやってみたら、そう簡単にはいかないということになって、すぐ館史編纂委員会ということにした。そして、一九八六年には「百年史」を編纂するという方針にしたのです。館史編纂委員会の最初の委員長は奥田修三先生だった。

岩井 たしかに学園史をつくるというのはそう簡単にできるものじゃない。私が館史編纂委員会の委員長になったのは常務理事の時であって、兼任していたのじゃないかと思えます。

川本 私の記憶では、細野前総長の意見も聞いて岩井先生と天野総長に推薦していただき、編纂室に上田勝彦さん（元立命館中高校長）を配属した。

松岡 そうですね、編纂室のスタッフは最初上田さんで、そのあと金井さん、崩場さんとなるわけですね。

編纂室に上田さんが配属されたときに、立命館として『五十年史』以来の編纂体制ができたわけですね。

岩井 上田さんは東大の国史を卒業した人で、いふなれば歴史家のプロだと思っただけだからね。ところが、資料の分類方法などで独自の見識をもっておられて、立命館史とはちよつと合わなかったのですね。

松岡 しかも後のほうは、もうご高齢でもありましたからね。

川本 私は上田さん、阿曾沼君と同志社の社史編纂室へ行った記憶があります。その時、同志社に立命館卒業生の河野仁昭氏がおられた。彼が事務局長のようなことをやって同志社の百年史を作ったので、どんなふうに資料を整理したのか、どこが一番悩みだったかというようなことを聞いて教えてもらった。その時に現総務部付部長の阿曾沼一成君が総務課において、彼に上田さんと仕事を始めよといって部屋をつくったのです。

松岡 同志社の百年史はほとんど河野さんが作ったようなものだといわれますね。

川本 そうそう、三分の一ぐらいは彼が書いたらしいのです。河野氏がそのとき私に言ったのは、年史にあの学部長のことを書いて、この学部長のことを書かないというのはやめた方がいい、個人の名前を出すのは実に慎重にしないといけないということだった。名前を出すのだったら十分配慮しないといけないというアドバイスをうけたのが記憶に残っています。

松岡 同志社ではとくにそうだね。しかし、河野さんは偉い、西日本の大学史資料協議会も彼らが中心になつてつくつたのだから。

川本 それと、書いてくれない先生が必ずでてくるから、その時に責任を持って書ける体制をつくつてお

かないと難しいという話を聞いた。

その頃同時に『西園寺公望伝』の話が入ってきて、そっちの方にもエネルギーをかけるわけです。

松岡 『西園寺公望伝』は何年に始まったのかな。

岩井 始まったのは、一九八五年です。天野総長の時に話しができました。私が趣意書を書き、理事会（一九八五年三月二二日）に諮ったと思います。それを具体化されたのが谷岡総長の時だということになりますね。一九八五年九月に西園寺公望伝編纂室を図書館特別閲覧室内に開設しました。

川本 それともうひとつ、『西園寺公望伝』や館史との間のどこかで中川小十郎の本を出してもらったんです。これは後藤さんに頼んだのです。その時の記憶では、とにかく立命館を創った人の本が一冊もないというのではいけないと思っていたところ、図書館から中川小十郎関連の資料ができたというので、後藤靖先生に見てもらったのです。そしてこの資料を本にできないかやってみてくれと行って作ってもらったのが『近代日本の政局と西園寺公望』です。それが『西園寺公望伝』の前でしょう。

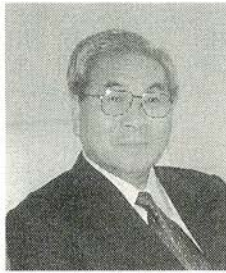
岩井 あれは『西園寺公望伝』の編集と併行していたように思うが、後藤さんが中心になって鈴木良さんが協力してくれたのです。鈴木さんは音をあげてましたよ。後藤さんに尻をたたかれ、急がされてものすごくしんどかったと言っていました。

松岡 あれはやっぱり、立命館にあった中川家資料のなかから出てきたものですか。

岩井 中川小十郎の口述を誰かが綺麗に清書したものがそのまま残っていたのです。

松岡 図書館の中川家文書の中にあつたのですか。

たのに。
 れていますね。前島さんは立命館に入って少ししか経っていないし、まだ歴史研究家ではないわば素人だったのに。



川本 私なんかは正直言つて、常務理事になるまで立命の歴史はあまり関心がなかったのですよ。自分が責任ある地位に就いたら、己の組織の歴史に関心を持たざるを得なくなつて、『五十年史』を読みかえしてみたわけです。『五十年史』を読んだ、これではどうかと思いました。昔だから通用したんだと思う。それで天野総長に相談したという記憶があります。

岩井 いや、中川家文書の中ではなかったと思います。図書館のどこかに置いてあったのです。文章の中身を見てみるとわかりきつたようなことも多い、それに長すぎるので、出版社は全部出すのは難しいという。そこで、後藤さんが紹介する価値があるところを選んで一冊の本にしたのです。あれは今でも、いろいろな学術文献に引用されたりして利用されています。

あの頃から、立命館の歴史をもう一回見直そうという空気がでてきたわけです。『五十年史』では物足りないからもう少しちゃんと見直そうという空気はありました。

学園史の見直し

岩井 しかも一年間でやらせたのですからね、そりゃ無理ですよ。中身が荒っぽくならざるをえない。

松岡 そして大事なことは、その時に集めた史資料が散逸してしまったことです。これは一つの大きな反省点です。

川本 事務局がちゃんとしてなかったからですよ。あれは前島さん個人に頼んだようなものだ。

松岡 錦林車庫のところにあった前島さんの家でほとんどやっていただけから。

岩井 前島さんに、あの時の資料はどうなつたんですかと聞いたら、全部一括して庶務課かどこかへ返したというのですが、全くどうなったのかわからない。

松岡 いつの間にか消えてしまったのです。どこからかひよこつと出てくるかもしれませんがね。

岩井 だけどそれは数少ない資料で、編纂室もあたえられず、恐らく家の中でやっていたにすぎないんだと思います。

松岡 そんなにたくさんではないだろうけどね。それは一つの反省点で、今後のアーカイヴズ確立の課題にもつながります。

川本 私の印象では、『五十年史』から今回まで歴史の整理がとまったわけですが、立命館は戦後ひたすら前を向いて走った学園で、自分が走った道を未整理のまま進んできた。ある意味では整理するのが難しい要素もあるのですけれど。立命館の歴史はいわば学園創造全体の運動史みたいなものですから、単純ではなく難しいですね。

岩井 大学は議論の多い所だから、AとえばBという人もいる。だけどそのAとBが議論する時の基準

になる一つの歴史的な事実みたいなものがはっきりしないまま議論するのはいかんと自分の経験から思ったのです。それで、八〇周年のときに「八〇年小史」みたいなものを作ろうじゃないかと、常務理事の西村幸雄さんなんかは言っていたのですが、しかし、私はそんなものを作るよりは、どうせ百年になったら百年史をやらなきゃいけないんだから、そのための資料集を作る方が役に立つと思うので、それからやろうじゃないかといった。資料集と年表くらいから手をつけるべきだといって、それじゃそうしましょうかということが始まったわけです。それははっきり覚えてます。

松岡 『八十五年史資料集』八冊と『略年表』は金井さんらの功績ですね。理事長が言う立命館の歴史を扱う難しさには、もうひとつ大きな背景があります。それは要するに「断絶史観」があつたということです。戦前は全部ベケで戦後は末川先生一本でちゃんと走ってきたという見方です。そのなかに「断絶史観」があります。それが百年史のところで見直しされています。

川本 その問題に入る前にちよつと。話がとんで恐縮ですが、岩井先生のおっしゃったように、本格的な九〇年史とか八〇年史をつくるのは無理だから、やはり資料整理をきちつとやろうとしたのはその通りだと思います。ところがそれで困ったのは、九〇周年の時に何の手土産もないということです。それで衣笠安喜さんに頼んで、歴史写真集を作ったのです。あれはあれで意味があると思います。

岩井 あの程度のものでしたら意味がありますよね。

川本 そんなわけで、歴史写真集を衣笠先生にやってもらったわけです。

松岡 あれぐらいの歴史写真集で年史がわりにしている大学もたくさんありますね。

川本 素材はたくさんあるが、館史編纂室なるものを作らなかつたら、立命館は歴史写真集程度のものしか作れないのです。だからこれに膨大な時間と金をかけたわけです。館史編纂室や百年史編纂室、これらを含んで計算してみなさい、それは膨大なものですよ。でも、歴史に残る学園史を編纂しようと思つたらそれが必要なんだと思いました。編纂室をつくつたから、ここまでこれたんです。正直いつてそう思います。

松岡 『西園寺公望伝』もそうですね。

岩井 百年史の通史第一巻は衣笠さんが非常によくやってくれましたね。あれができたことによつて、世間にたいして立命館の一つの重みのようなものができたのは事実ですね。その重みというのは、立命館が波に乗つてどんどん発展しつづつあるということを背景にしているわけですが、第一巻は非常によくできています。ただ、あの第一巻をつくるために史料を随分収集したということもありますが、やはり発想の転換をしなくてはいけなかつたんですよ。立命館の戦前は全部駄目だという考え方から発想の転換をしないと第一巻はできなかつたと思います。

松岡 第一巻は大変よくできていると東大の『史学雑誌』なども高く評価した。

岩井 学問的な評価を受けたといえる。

川本 岩井先生のおっしゃる発想の転換はなぜできたのか、なぜ発想の転換をしなくてはならないと思つたのか、それは学園の課題を前向きに設定したからだと思います。未来に向かう必要のない者は過去を見ないが、前に向かつて大きな課題を設定したら過去を見ざるをえない。そういう相関関係があるのでないか。だから西園寺を見直し、小十郎を見直し、立命館の歴史を見直したというのは、前を向いて課題を設定した

からだと思は思う。

松岡 前を向いて壮大な課題を設定しているから、過去を見直さざるを得ないわけですね。

川本 前を向かずにそれだけをやると、めった打ちにされるんです。

岩井 第三次長計というのはそういう意味では大きな意義を持った。私は、衣笠一拠点計画が終了した直後にこの長計に深く関わって、最終答申なんかの文章もほとんど手を入れたりしました。あの時に将来はどうかというのかというシミュレーションもやりましたが、過去との関係がどんな風に繋がっているのかを考えた。あのころ国際化・情報化・開放化というスローガンを三つ打ち上げたわけですが、それは細野総長までの時代の現代化・総合化・共同化ということだけではもはや駄目なので、やはり国際化を入れなければいけないということになった。その時代になってそういう目で見てみると、それまでの立命館の歴史について、あらためて評価をしていかないと自分のものにならない。それがなければ、ただ流行に乗っていったというだけになってしまいます。私にはそういう意識はかなりありました。そんなことをださなくてもよいのではないかという消極的な空気もありました。だけど私は、このままではいけないと、長計の取り組みの中で非常に強く感じました。

川本 例えば、国際化の課題を立てたとき、立命館の最大課題は国際関係学部でした。その国際化の課題について議論すれば、西園寺について見直すことになるわけです。この西園寺の世界主義というのを国際化との関連でとらえ始めたのです。

松岡 多少は牽強付会であったかもしれないが、戦後直後の単なる国際化ではなく、二一世紀を展望した

新しい時代の国際化ということにかかわって、背骨の通った自由主義者、そして国際主義者としての西園寺公望像を打ち出したのです。

岩井 しかし、実際に大正期の立命館の体質を見ると、それほど偏狭な国家主義ではなかったように思えます。

松岡 そうですね、明治の末には「東方語学校」という外国語学校みたいなものも出てくるぐらいですからね。社会的要求や需要もあったたのでしようが。

立命館の総合力

川本 『立命館百年史』通史第一巻には、重さというか質的なものがある。

岩井 それと、国際化はスローガンとして出したからはつきりしているけれども、もう一つの問題は、長計のなかで、要するに一八才人口の減少で志願者が激減することを、あの時に見通していました。その点はこの大学に比べて非常に早かったと思います。それに対して、どうして志願者数・学生数を確保していくかを考えたときに、重要なことは女子進学率の向上ということに着眼した。女子を積極的に大学に吸収していく為の方針を持たなくてはいけないということがあった。それはスローガンにするには恥ずかしいようなものですが、ただ非常に意識していました。そして、衣笠キャンパスをつくっていく上では、女子トイレの問題まで考えなくてはいけない、広小路のようなことではいけないということで意識的な取り組みをしまし

た。

松岡 そのことは大事な点だったが、必ずしもスムーズにいったわけではないですね。スローガン的には立命館は「平和と民主主義」ですから女性を重視しますが、立命館中学校高等学校の新しい展開の時も、男女共学については当初から現場の賛成が必ずしもなく、それをずっとひきずっていた。

川本 北大路の三千坪程度の所から二万五千坪のキャンパスへ移す時に、男女共学にしなかったら移転はできない、単なる中高移転ではなく「拡充」移転であることを強調して進めた。

男女共学反対という意見もあって、どういう理由かと聞くと、「初めての経験だから」とか「女性の先生がない」とか、そんなことでもめていた。私が見るところ、中高における同志社とのハンディは女子教育の問題です。京都のお母さんには立命館を語る人が少ないという問題意識があった。

岩井 立命館は異様に男っぽい大学だったですね。世間のイメージからいうと、親はそこに娘を入れるなんてどうてい考えないわけですね。そこを変えなくてはいけなかった。

松岡 関西でいえば、同志社が最初から女性が多く、その次に関学で、関大と立命館は男っぽい大学だった。尚且つ私などが愕然としたのは、一九七九年に、関大の方が立命より女子比率が高いことを発見したときです。それで大いに反省して、女子を立命館に引き寄せてくるということを、苦勞して意識的に取り組んだ。それでもやはり抵抗はありましたね。組合の教研集会でさえ女性はいらないという意見があつて大喧嘩したりしました。

川本 女子学生を意識し、それが増え始めるうえで立命館にとって助けになったのは、文学部があつたこ

とですね。その次に産業社会学部ですが、これが女子学生を呼びましたね。やはり、法学部・経済学部・経営学部では女子はこない。女性というのは文化的なものに関心が高い。自然科学や法学や経済学への関心はもつとあとになります。全国的に女子の高等教育を受ける率が上がってくると、経済や法学部も増えてきますが、最初はなんといつても文学部と産業社会学部です。

松岡 初めは文と社会ですね。文・社会から法律になるのですね。全国あるいは全世界そうですね。

川本 その意味でも産社を創ったことはよかったと思いますね。

松岡 国際的にもそういう順に増えています。ハーバードのロースクールなんかでは一〇年も前に女子の数が男子を超えました。東大・京大の法学部はうちよりも女子比率が高いのですよ。

岩井 長期計画に取り組んで、そこで一度歴史を見直した方がいいという気持ちが始ってきたということはどう否定できない。立命館の全体が変わらなくてはいけないと。

川本 先ほど言いかけたのは、第一巻を出したことによって立命館大学の重さと言うか、大学の質というものをアピールしたというか、理解して頂いたというか、いろんな表現が出来ると思いますが、そういう社会的・歴史の意味が館史の刊行にあったと思います。それは丁度この間ラグビーで立命館が同志社に勝ったということと意味が似ていると思います。例えば、かつての二〇年か三〇年前の立命館がラグビーで同志社に勝ったとしても、それは単にラグビーが強くなった立命館ということになった。館史におきかえていえば、立派な館史ができたら立命館にも立派な学者がいるなあとということになる。しかし、今の立命館はそうではなくて、館史の質がすなわち学園の質という事になり、ラグビーで同志社に勝ったという力は、立命館の総合

力を表現したことになるということです。要するにその質や力は突然変異ではなく、総合的力量的表現なんです。この館史の重さはそういうところに意義がありますし、スポーツなども全部そうだと思います。

松岡 特に、ラグビーはそうなんです。ラグビーが今になってやつと勝ったのだが、ここで本物の力が証明される。アメフトとか野球もそうだが、ラグビーは若干遅れたということだ。

岩井 ラグビーと言えば、同志社というイメージがありましたからね。だけど、実際にそこだけが突出してるわけではなくて、全学的な力量が大きくなっていくなかでスポーツも台頭してきたという感じですね。
川本 本学の第三次長計をはじめとする取り組みは総合的なものだから、他大学では簡単に真似ができません。立命館は内ポケットからも外ポケットからもズボンのポケットからもいろいろ成果が出てくるというわけですね。

岩井 先日の都ホテルであった全国校友大会で、応援団とチアリーダーが一緒に出てきてうまくいくのかなど思ったんですが、誰が演出したのかわかりませんがうまく調和してるんですね。あれは古いものと新しいものがうまく融合した光景だと思います。

川本 いったみれば、袴とミニスカートの融合ですよ。

岩井 僕はあれを見て一種の感慨をもよおした。案外うまくいくものだなと思いました。

松岡 チアボーイまで出てくるんですからね。先ほどのことは、要するに前を向いて進んできたところで、断絶の見直しも含めて、歴史を振り返らざるをえなくなったということですね。逆にいえば、歴史を振り返らなければ前も見えないということですね。そういうことで館史の編纂とその周辺の『西園寺公望伝』『近代

日本の政局と西園寺公望』や川勝傳さんの『激動の時代を生きる』などの貴重な取り組みがしっかり連動しながら進められた。

百年史編纂室の最初、私が編纂室長になる前の一〇ヶ月ぐらい西川賢君がアルバイトを入れて一人だけでやっていた。そこでそれまでの一〇年来の取り組みを受けつぎ、私も突然任命されて以後まる一〇年経ったところで、さきほどから出されている点がいきいきとあらわれてきた。それは結局学園史の取り組みによるものです。通史の完成はまだ三〜四年かかりますけど、そのあと壮大な成果を継承して「立命館アーカイヴズ」がたちあがることになる。

自由に論議できる立命館

川本 今日、立命館の到達した要因はいろいろありますが、ひとつは立命館が単科大学じゃなかったのがよかったということです。総合大学でいろんな人がいてくれてよかったと思います。後藤さんや奥田さん、そういう人達が参加して歴史の見直しができるんですね。

松岡 いろいろな学部の人達が一致結束してできる。

岩井 そこにやはり戦後立命館民主主義の力が出てきたのだと思いますよ。例えば、なくなった後藤さんが定年後京都橘学園へいったでしょう。彼はむこうでいろんな役職もこなし学生指導も一生懸命やられましたね。

松岡 立命館で働いた教職員はどこでも自分が今いるところで力を尽くそうという人を育てていったわけですね。細野武男先生だって、そういう意味では貴重な働きをなさったわけですね。

岩井 同志社には新島会というのがあって、私は別に会員でもないんですが、いろんな集會に引っぱり出されて、今までに三回ばかり話をしました。今度は四回目ですが、そのための打合せだの何だのと何回もやるんです。同志社の人達には、新島襄という創立者の人格があって、確かにそれが一つの支えになっているのでしようが、新島までなると、彼に対して解釈の仕方が人によっていろいろ分かれてくることもさげがたい。一人の人物をめぐっているんな考え方があり、それがそれぞれの人の一つの信念みたいになっていって一致にくい面も出てくる。ところが立命館は中川さんを絶対視することはないし、末川先生だってそうはならない。中川や末川を批判しても構わないという空気がちゃんとあるんです。批判してそこから力を作りだすということが必要なんです。

川本 谷岡先生が総長のときに、本学創立者中川小十郎の名声はそんなに高くないと、話されたことがあった。そこで私は、先生そういうことも言えるかもしれないが、創設者が偉いとかえって大変ですよと言った。同志社は学園紛争のときもいわば真つぶたつになったが、あれは新島襄の「偉大さ」におんぶしてしまったからだといった。中



川小十郎をめぐってうちは対立しませんから、先生たちも好きなこと言っても大丈夫、だからうちはいい学校だと言ったら、谷岡先生もそれもそうだと言われた。

松岡 二〜三カ月前に教育ジャーナリストの山岸駿介氏がここにきて、岩井さんも同席してもらって立命館の元祖のことを話したが、彼は中川小十郎はあまり大したことはないといいたいわけだ。西園寺さんについていろいろな評価がある、私たちはそれだけにとらわれないうんだという話もしておきました。

川本 うちは元祖であろうとなんでであろうと、いいところをとったらよい。

松岡 末川先生についても、そのいいところをとって、それを前向きにつなげていく力があればよい。同社も前向きの力が出てくれば、新島襄が活きてくる。

岩井 立命館は宗旨から自由なので、それを生かさないといけないと思う。学内でいろんな意見があってもいいと思う。議論してそれが一つにまとまって、これで行こうということになればいいんだ。

松岡 戦前は戦前で立命館にはセクシヨナリズムの生じる暇がなかった。

岩井 戦前はそこまでいかなかった。

松岡 戦後は戦後で『平和と民主主義』を統一的にすすめた。セクシヨナリズム打破というのは末川先生の功績ですね。立命館の運営は「自転車操業」が続くなかで、民主主義的に進んだからその辺がうまくいったんだ。そういうなかで歴史が見直され人間そのものも見直された。中川小十郎の評価も大きく変わった。末川時代は、小十郎はだめだということになりきっていたから、京大事件でなぜ退官教授を大量に招聘したのかがわからない。また、戦時中の東条体制に反撥した石原莞爾がなぜ立命館に招かれたのかもわからない。

それらの問題はあとから解明され見直されたものだ。若い時の山田美妙との関係もそうだし、ウルトラに民主的な「女子教育論」が、反動的な「禁衛隊」創立のまま裏側にあったことなども第一巻の編纂過程で明確になり、中川小十郎を見直すことができた。

川本 そういうように、学園に関係する歴史的人物を検証すると、いろんな波及的効果がいっぱい出てくる。その波及的効果のひとつが、例えば石原廣一郎の果たした役割についても見直されたことだ。編纂室を中心にそういう流れをつくり始め、いろんなものを発掘してきたということが大事だね。

松岡 まだまだわからないことがいっぱいあるが、全体としてかなり客観化されてきた。だいじなことは、それを将来の力に生かすことだが、まだまだこれからです。だから百年史編纂室やアーカイブズが重要だ。京大はさっさと百年史をつくり、文書館もつくった。

岩井 そう、京大はすでにアーカイブズをつくった。担当者は、京大の百年史を非常に前向きに取り組んだが、やはり評価がまとまらないから書けないことがあったのです。

松岡 京大事件すらかなかなかちゃんとは書けないのですから。

岩井 資料だけはちゃんと残して、将来の評価に任せようということになってる。

岩井 京大でも戦後の天皇事件をはじめ、必ずしも十分には書けない部分がある。

川本 資料があっても書けないのです。

岩井 そうです。資料があっても、あそこまで大きな政治的事件になるとなかなか客観的に書けないのです。

松岡 資料があっても京大事件の残留派、復帰派などのことがなかなか書けない。戦後になってその人た

ちの行動がかえって生きてたりするんです。第二次滝川事件などで、京大事件の残留派の人達の方がかえって正しい意見を出すというようなこともあり、大変複雑なんです。

岩井 京大の文書館などでは、関係者が残したもの、書簡、書類、メモなんかも保存してますが、これは必要なことです。戦後のわれわれの世代になると、手紙とか文書とかはあまり書かないですね。ハガキくらいですね。

松岡 いろんなビラとかもあります。おとといの天皇事件の座談会では、告示なんかを持ってくる人もいました。それらの資料もアーカイヴズに集めようとしているのですが、立命館の資料も、西川君が書いているように、もうこの一〇年、二〇年でまた散逸しかけている。文書が多すぎるのか、目の前のものをどんどん捨ててしまう。現代っ子のポイ捨て主義が資料のところにもできてきている。文書規程を含めてもういっぺんやり直さないといけない。

「立命館総合資料センター」を展望して

川本 編纂室から、学園の資料をどういう具合に残していくのか、そのために各部局が編纂室にどのような集中していくのかという問題をもう一回提起しないといけない。文書規程で、資料を廃棄する場合は百年史編纂室に相談することとなっている、それだけでは世の中そんなにうまくいかない。文書保存の問題で一番中心にすべきことは、百年史編纂室と総務課とのつながりです。総務課が常任理事会、理事会に出して

いる資料を全部一旦百年史へ渡すようにする。そして、編纂室はそれを見て、この資料は教育学部のところにもっと別の詳細な資料があるはずだと判断する。いろんな委員会で作られる資料があるわけですからね。総務課を中心にそういうふうにやれば、日常的に資料があがってくる。そういうシステムを作らないといけないと思う。

松岡 規程だけではどうにもならないが、規程もちゃんと見直して日常のルーティンワークに定着させないといけない。

川本 学園関係の資料をきちんと集め、保存し整理していくというのが重要な役割だが、これからの百年史編纂室はそれだけではだめです。もっと積極的に歴史資料を生かす方法も検討しなければなりません。

松岡 課題は二つあって、その一つは社会的に公開する問題です。多くの人がここへやってきて、いろいろ勉強してもらおう。もう一つは学内の具体的な政策をたてる時、資料室にきて、まず基礎的な知識を得てからやるということ。しっかりした方針というのは、もう思いつきではやれなくなっているから、具体的な長期的・中期的政策を含め、各部課からここで勉強して基礎知識を得て、全体の歴史の流れのなかでの位置づけを決める。事務局も各学部でもそういう癖をつける必要がある。なんとなく骨董品が詰まっているという編纂室やアーカイヴズではだめです。公開の問題とともに具体的な政策づくりにおいてその位置づけをしっかりとっていくための拠点になる必要がある。

川本 そういう形で生かされているところは日本にあるのかね。

松岡 まだなかなかね。

川本 その新しい機構は編纂室ではなくどういう名前にするかね。

松岡 立命館アーカイヴズなのだけれど、要するに総合資料室、仮称だが「立命館総合資料センター」構想で、その概要は「ユニタース」(第三二九号)で公表しており、百年史編纂委員会常任委員会でも提起しているが、それを今後、具体化することになっている。

川本 そのセンターのありようも未開拓だ。新しいものを作らないといけない。

松岡 外国の大学では出来つつあるんですが、それがどういように機能しているかも含めて研究しなければならぬ。図書館より大きい大学の資料室が外国にはあるようだが、それらは三百年、五百年の歴史を持つていてる大学で、それが売り物にもなっている。京大でも「総合博物館」などが人気を博し、うちの平和ミュージアムよりたくさんが入ってるらしい。

「立命館小史」発刊の必要性



岩井 『百年史』を出して、それが大学の「正史」だといわれています。「正史」

というのは国家が編纂したものを正史と言ってきたのであって、それは正しい歴史という意味ではない。大学の正史というのはそういう意味ではなくて、今の時点でまとめてわれわれが作り得たものだ。しかし、これからまた時代も変わるし、違った目でみて批判の余地が十分有りうる。そういう批判をうけ、さらに新しいもの作

ろうというときの基礎になりますね。そういう意味で、『百年史』を作ったことで完結したのではない。アーカイヴズというのはあとに伸びるひとつの基礎になるというのが一つの位置づけです。もう一つ言うと、百年史というのは、これだけの意気込みで、これだけのものが作られつつあるわけだが、三巻とその資料編が出来ても、なかなか現場で働いている人がこれを読むということにはならないと思う。ポリウムからいっても、よほど暇でないと読めない。だから百十周年あたりの機会に「立命館小史」というようなもので、少し簡単な誰にでも読めるようなものを作ること考えたほうがいいと思う。そうすればそれなりにみんな関心をもつようになる。あるいは人によっては、『百年史』も読んでみようかということになるかもしれない。現状では、実際問題これだけの大部のものは、よほど時間のある人でないと読まないと思う。全部が読まないとはいいませんし、これを作ったことは非常に意味があると思う。責任のある立場の人は、新しいことをやらないといけないときにもう一度これを見てみようということになると思う。しかし、一般の教職員がはたして読むかと思ったら、読まない。僕はコンパクトなものを作る必要があると思う。

松岡 それは百十周年というよりも、いまつくっている『百年史』のダイジェスト版として必要です。これは教職員のこともありますが、学生に読ませる必要がある。いくつかの大学ではすでにできている。

川本 そうだ、館史が完成するときに、ダイジェスト版を作らないといけない。

松岡 全新入生に渡せるようなものをね。慶応なんかもだしている。

岩井 あれよりももう少し立ち入ったものであってもいいんじゃないかという気はするんです。

松岡 これは新しい課題で大事な問題です。第三巻の編集が始まっていますが、これが完成したら同時に

できるようにしなければならぬ。

川本 それは学生を含めた学園関係者のアイデンティティ確立の問題だと思う。そういう意味でダイジェスト版を作って役立てる必要がある。岩井先生がおっしゃるとおりで、『百年史』を全部読むというのは責任者の関心がある人だけで、一般の人は読まないですよ。

岩井 新任教職員の研修に使えるような内容のものを作っておかないといけないと僕は思いますね。

川本 岩波新書版程度のものでね。

岩井 学園規模が小さい頃は意思統一は簡単だったけれども、これほど大きくなって教職員も流動性が激しくなると、やっぱりそういうものが必要じゃないかな。

松岡 慶應は福澤のものを毎年出し、同志社も新島のを新入生に配っている。もう少し立ち入ったものを作る必要がある。それに関連して言えば、来年の四月から「立命館史」の一般教育特殊講義を開くことになっている。すでに数年来私も「平和学」のなかで少し「立命館史」を取り扱いました。他の大学もやりだしているが、学園の歴史を一般教育で来年からやろうということになっている。これはひとつの貴重な取り組みになります。それを基礎にしながらダイジェスト版が出来るのではないかと期待してるんですが。小関素明君と柳ヶ瀬孝三君に山下健次百年史編纂室主幹もかかわってカリキュラムをいま論議しているのです。第三巻も再来年に完成を目指していますし、ダイジェスト版もそのころには、教職員全員と新入生に配れるくらいにし、そういう中でアーカイヴスが出来上がっていくというようにしたい。

川本 それともう一つ、これまでは館史編纂室に両足を突っ込んで本気でやってきた人間がいたからでき

たが、これからは近代化されて、第二の岩井や松岡はもう居なくなる。システム全体が近代化して機能別になっていく。またそうしないとまたないんです。そうすると、教員を組織し、片方では研究の手伝いをしながら編纂室の運営をおこなっていくというような体制をお膳立てをしないといけない。そういう分野をもたないといけないと思う。

松岡 中心になって動かす組織をつくる必要がありますね。

岩井 研究会みたいなものも必要になってくる。いままでは百年史編纂ということで、編纂に直結する形での研究会だったのですが、もう少し緩やかなもので周辺のことを含めて多角的にやっていくことが必要だ。編纂と直接関わらなくていいのです。

松岡 そういうことを含めて、百年史編纂室一〇年の折り返し点は、今後のありかたを含めて検討課題が山積しているといえますね。本日はどうもありがとうございました。